

「美術家と一緒に作る展覧会」レジュメ

出原 均

西洋では17～18世紀、絵画と彫刻を中心とする美術の概念が生まれ、絵画は、油彩画を頂点とする素材と技法、彫刻もブロンズ（塑）や石（彫）による制作を頂点とする領域が確立されました。

こうした近代美術の世界は20世紀に大きく変化します。そのはずみをつけたのは、マルセル・デュシャンです。彼は、既成の日用品を作品にしました。その背景には、工業製品が多量にあふれるようになった状況があります。

このオブジェの考えを展開すると、あらゆるものが美術品になる可能性を持つようになります。実際、オブジェの考え方は、最初はゆっくりとですが、徐々に加速し、第二次世界大戦後、多くの美術家が行うようになっていきました。もちろん、従来の絵画や彫刻のジャンルも健在ですが、もはや多様な美術の中のひとつのジャンルにすぎません。この百年の美術作品を思い浮かべれば、美術品にならないものを考えることが難しいくらい、あらゆるものが美術品になっているのです。

このような美術品の大きな変化は、当然、美術館やギャラリーの役割においても変化が生じます。その点を、学芸員と美術家のつながり方から見ていこうと思います。

それまでの画家や彫刻家は、扱う素材と技法についてはプロです。この素材には、あの技法が、と適切な判断の下に制作を行ってきました。しかし、あらゆるものが作品になる可能性をもつなら、芸術家が従来のように精通することはできなくなります。どこから素材を集め、素材をどう処理するのか、どう制作の中に組み込んでいくのか。美術家はそれを追究しますが、けっして一人ですべてを処理できないことがあります。むしろ、制作に様々な人を巻き込まなければ進まないこともあります。美術館やギャラリーと一緒に作品や展覧会を作ったりします。学芸員は、場合によっては、創作の世界にどんどん入っていくことさえあるのです。

その点を、先日まで開催されていた「榎忠展 美術館を野生化する」で具体的な事例を挙げて確認しようと思います。

それは、一方で、学芸員の作業が複雑、多様化していることを表していますが、より重要な点は、美術館の役割や機能の変化と、美術家の創造性の変化がそこに見られることです。

まず、美術館は、これまで以上に、さまざまな様々な製作会社や、関係機関、地域とつながる必要があります。様々なネットワークをもった美術館がより重要になってくることでしょう。

もうひとつ。美術家の創作においては、技術とは必ずしもつながらない創造性を考える必要があります。それは、実は、広く様々なところにあるように思われます。美術家の態度、心構えからはじまって、美術家の考え、コンセプト、アイディア。様々な事態に直面したときの判断。もちろん、従来のように、作品制作に必要なセンスはいうまでもありません。いずれにせよ、様々な面で美術家の創造性は発揮されます。また、創造性はよりオープンになっているといえるでしょう。